

THE NIPPON DENTAL REVIEW

日本歯科評論 7

July 2018
NO.909
VOL.78(7)

新連載

一般臨床家だからできる! プラスαの矯正治療

矯正+歯周治療 編——生涯にわたり歯を残して美しく!

私の臨床

患者満足のためのコンポジットレジン修復

臨床の視点から

歯髄診断および感染根管治療に悩んだ1症例

新連載

「おいしく食べる」をサポートする 味覚の科学

特別企画

Q&Aでわかる

**ノンメタルクラスプ
デンチャーの
できること,できないこと**

口腔がん検診が果たす今後の口腔医療の行方

——「地域の口腔がんを考えるシンポジウム」という試み

しば はら たか ひこ

柴原孝彦

東京歯科大学 口腔顎顔面外科学講座 主任教授
〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-9-18
一般社団法人口腔がん撲滅委員会 代表理事

日本の口腔がん死亡率は米国の“約2.5倍”という事実

日本人の口腔がん罹患数は現在も増加の一途を辿り、罹患数・死亡数ともに30年前と比較すると約3倍以上になっています。その結果、日本人の口腔がん・咽頭がん*1の死亡率*2は、国立がん研究センターのデータを基に割り出すと46.1%（2013年）であり、米国（同19.1%）と比較すると、なんと“2.5倍”も高いのです（表1・表2）。

さらに、最新のWHOのデータ（次頁の図1）をご覧ください。人口が約3倍多い米国を追い越してしまうような勢いで、日本の口腔がんの死亡数が増加し続けているのです。この

*1：日本では口腔がんの罹患数や死亡数のデータ（国立がん研究センター）は「口腔・咽頭がん」とひとまとめにされており、「口腔がん」単独のデータは公表されていない。

*2：同年における口腔・咽頭がんの死亡数を罹患数で割った率。

表1 がんの部位別罹患数、死亡数、死亡率（2013年）

部位	罹患数(人)	死亡数(人)	死亡率(%)
口腔・咽頭	15,560	7,179	46.1
同(米国)	41,380	7,890	19.1
膵臓	32,330	30,672	94.9
子宮頸部	10,737	2,656	24.7
乳房	68,071	13,148	19.3
皮膚	14,863	1,525	10.3

文献¹⁾より改変

表2 米国における口腔・咽頭がんの罹患数、死亡数、死亡率（2015年）

部位	罹患数(人)	死亡数(人)	死亡率(%)
舌	14,320	2,190	15.3
咽頭	15,520	2,660	17.1
その他の口腔内	15,940	3,800	23.8
口腔・咽頭計	45,780	8,650	18.9

Cancer Statistics, 2015. より改変

問題は、われわれ歯科医療に関わる人間にとっては由々しき問題と言えます。

早期発見の仕組みができれば、多くの人の命を救うことができる！

口腔がんは、早期発見さえできれば非常に治療成績のよいがんです。事実、ステージⅠ＋Ⅱにおける5年生存率は95%以上とする報告が多く見られます。

しかし、基幹病院に初診で来院する口腔がんの疑いのあった患者のステージ分類は、全国平均で見てもステージⅢ＋Ⅳで50%を超えている³⁾とされています。当大学のデータでも、この10年間の初診患者のステージⅢ＋Ⅳの割合は63%と、ステージⅠ＋Ⅱの割合は37%をはるかに上回っています。つまり、患者は、口の中に4cm（ステージⅢ）を超える腫瘍

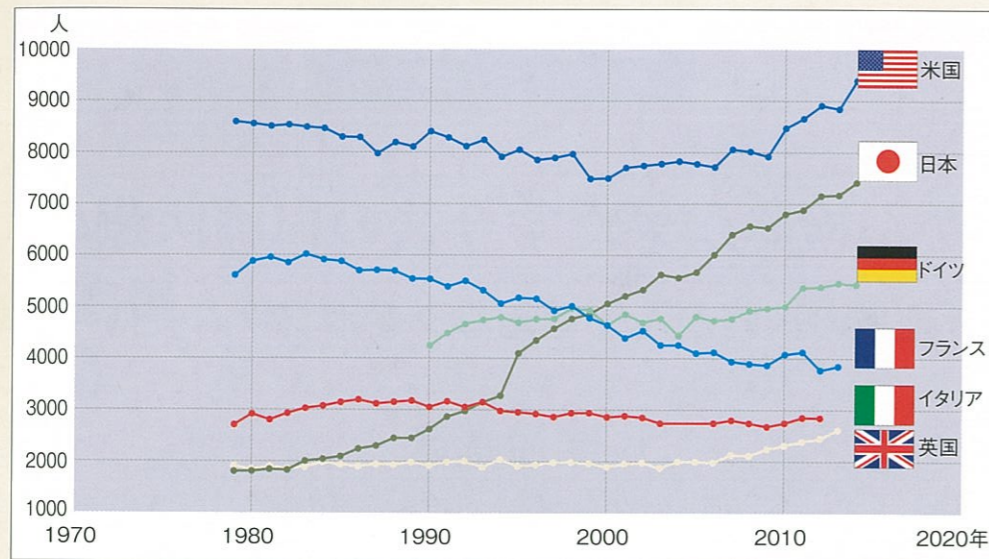


図1 日本と各先進国における口腔・咽頭がんの死亡数の推移 (文献²⁾より改変)

ができて初めて大学病院に来院するのです。

この割合を大きく変化させることができれば、つまり、少なくともステージⅡまでの段階で基幹病院に紹介していただけるような早期発見の仕組みが構築できれば、多くの人の命 (現在の罹患数から想定すると年間で約5,000人) を救うことができるのです。

口腔がんの第一発見者は開業歯科医院の歯科医師や歯科衛生士

では、誰が早期発見の役割を担うかと言うと、開業歯科医院の歯科医師と歯科衛生士です。つまり、日常的に患者の口腔内を観察している歯科医師や歯科衛生士の皆さんこそ、口腔がんにも最も早く気づく機会を持ち、さらに「これはおかしい！」と思った際に専門医に気軽に相談できる仕組みを整えば、現在失われている多くの命を救うことができるのです。

口腔がんの発症には、細胞レベルで遺伝子の損傷が起きてから通常10年以上かかると言われています。また、ほとんどの口腔がんは前がん病変などの病態を段階的に経てから発症します。そのことを考え合わせると、全国に約7万施設ある歯科医院、約9万人の診療所勤務の歯科医師と実働約12万人の歯科衛生士という、一口腔単位を管理する方々の役割は非常に大きく、口腔がんを疑う目を持ち、何か異常を発見した場合に速やかに地域基幹病院の口腔外科専門医と連携する仕組みの構築と合わせ、自ら口腔がん検診活動を実施していただくことが、口腔がんの予防や早期発見における大事な対策と考えます。

「地域の口腔がんを考えるシンポジウム」の企画・開催スタート!

そのことを皆さんと一緒に考える機会として企画し、各県の歯科

医師会や歯科衛生士会にご後援いただきスタートしたのが「全国道府県：地域の口腔がんを考えるシンポジウム」です。

これまで開催した20回のシンポジウムはすべての会場において満席となっており、口腔がんに対する関心の高さが窺える結果と考えています。

直近では、4月22日の広島県での開催 (図2) で西日本編 (全11県で12回開催) が無事終了しました。西日本編では総勢約1,400名にご参加いただき、また、昨年5月7日の北海道 (札幌) を皮切りに開催した北日本編 (全8県で8回開催) での参加者数約660名を加えると、2,000名を超える歯科医師や歯科衛生士の皆さんに参加していただき、各地域の口腔がんの実態認識と早期発見のための対策実施について考えていただく機会となりました。

主催する一般社団法人口腔がん



図2 4月22日に広島県歯科医師会館にて開催された「地域の口腔がんを考えるシンポジウム」第2弾・西日本編の一環として200名近い参加者が集まった。

撲滅委員会の第一の目標は、全国に口腔がんの予防・早期発見・早期治療の仕組みが定着することにより、口腔がんの死亡率を米国以下にすることです。シンポジウムやアンケートを通して改めて気づかされたことですが、日本の口腔がんの現状は、開業されている歯科医師や歯科衛生士の皆さんに正しく認識されているとは言い難いと思われま

す。アンケートには以下のようなコメントがありました。

「日本の口腔がんがこれほど多いとは知りませんでした」「世界に比べて日本の口腔がんの検査や治療の状況が見劣りするのには歯科医師として恥ずかしい」さらに「口の中のがんを歯医者が見つけないで誰が見つかる!? と自分に言い聞かせたい」との熱いコメントもありました。

地域の口腔がんを考えるシンポジウムは、まだまだ続きます。第3弾は今年の6月から9月まで中日本で、秋から2019年末にかけ

ては第4弾として関西・四国地区で、そして第5弾として関東地区での開催を計画しています。

また、今後はシンポジウムの開催だけではなく、2012年に開発して全国約900の歯科医院でテストトライアルしていただいた病診連携のプラットフォームとなるシステム (オーラルナビシステム) や各種教育研修ツールの提供、そして患者向けの啓発用ツールなど国民に向けた周知活動にも力を入れていきたいと考えています。

全国の開業歯科医院には多くの「救える命、助かる命」が来院しています。皆さんと一緒に、日本の口腔がんの死亡率を低減させ、多くの患者の命を救っていきたく思います。

口腔がん検診に取り組むことこそ、真の口腔医療への道

これまで口腔がんは、希少がん (10万人に2~3人) であり、かつ男性の高齢者に多く、その原因は喫煙や飲酒などの生活習慣が

主であると考えられてきました。しかし、現在では傾向が異なってきており、10万人に7~8人の罹患数と言われ、もはや希少がんの域を超え、女性や若い層の口腔がんが増加傾向にあるのです。

これは世界的にも同じ傾向にあるのですが、発生原因としては、歯列不正や咬傷、食事、さらに日本ではまだ少ないと言われてい

ますが、子宮頸がんの原因ともされているHPV感染も疑われるようになってい

日本の歯科医療は、特にう蝕治療に代表される治療中心から、ようやく歯周治療を中心とする予防歯科へ移行しつつあります。筆者はさらに、命に直結する口腔がんの予防と早期発見 (早期の口腔環境改善や定期的な各種口腔検診)、さらに食育まで含めた全身を見据えた予防に取り組むきっかけとなり、欧米並みの口腔医療へ繋がる、予防重視の歯科医療の第一歩になるのではないかと考えています。

参考文献

- 1) 独立行政法人国立がん研究センターがん対策情報センター：がん情報サービス。https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/index.html
- 2) WHO Mortality Database 2017。http://apps.who.int/healthinfo/statistics/mortality/whodpms/
- 3) https://www.cancer.gov/about-cancer/understanding/statistics
- 4) 柴原孝彦：口腔癌検診における蛍光観察装置の有用性。新医療、44：88-91、2017。
- 5) 柴原孝彦：口腔癌検診の現状-早期発見の試み。日本臨牀 75巻増刊2 頭頸部癌学、282-286、2017。